

# 月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



屋外の飲食スペースで談笑する団地住民（復興公営住宅東原団地『福光展』）

## 特集 「身守り」安心のかたち

- 仮設住宅のお茶会が、入居者同士の見守りに ③  
仮設雄勝森林団地（宮城県石巻市）
- つながりから生まれた、住民による見守り活動 ⑤  
鹿野復興公営住宅（宮城県仙台市太白区）
- 野菜づくりをきっかけに、見守られ、見守り合う関係に ⑦  
菜園クラブ「はなみずき」（岩手県陸前高田市）

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント  
（同志社大学 社会学部 准教授 永田 祐さん）

S(支え合い)-1 グランプリ 第4回いがす大賞 準大賞受賞 ⑨  
人形劇団あんど娘（岩手県大槌町）

まじわる災害公営住宅③ ⑩  
「つなプロ」復興公営住宅自治会情報交換会（宮城県仙台市）

まじわる災害公営住宅④ ⑫  
復興公営住宅「東原団地」（福島県郡山市）

東北の元気⑩ ⑫  
特定非営利活動法人奏海の杜（宮城県南三陸町・登米市）

いきがい仕事⑮ ⑬  
オーダーメイドジュエリー工房Lipatti（宮城県仙台市青葉区）

平成・向こう三軒両隣事情⑪ ⑭  
ご近所福祉クリエイション主宰 近所福祉クリエイター 酒井 保さん

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

東北の元気④ ⑯  
るんびにい美術館（岩手県花巻市）

特集

身守り

# 安心の



同じ地域に住んでいる人と。同じ趣味をもっている人と。  
そんな自分と人との「つながり」に、ちょっとした思いやりなど  
「自然な心遣い」が加わって、見守りが生まれます。

地域の人とお互いに見守り合えば、  
生活のなかの困りごとを身近な範囲で解決できます。  
見守りを通じてつながりは深まり、広がり、  
地域の人たちと一緒に過ごす時間は、  
一層生きいきと楽しいものになります。

地域の人同士で交流し、見守り合いを育むほど、  
あなたの地域がもっと暮らしやすくなるでしょう。

見守りは住んでいる場所や人によって、かたちはさまざまですが、  
どんなかたちであっても、地域に住む人、仲間に向け、  
気にかけるという土台は同じはず。

お互いに気にかけることから、  
困ったときに、手伝ってほしいときに、  
支え合えるような関係—安心のかたち—が  
生まれてくるのではないのでしょうか。



寒い季節は、屋内でのお茶飲み

# 仮設住宅のお茶会が、入居者同士の見守りに

◎仮設雄勝森林団地（宮城県石巻市）

## ポイント

- 周囲の思いやりで、認知症の人も地域で暮らしやすく
- 一度築かれた見守りは、暮らし方が変わっても続いていく

宮城県石巻市の雄勝地区。海から離れた山間部にある雄勝森林公園の敷地内には仮設住宅の「仮設雄勝森林団地」が設置されている。約40戸の仮設住宅が設けられたが、通勤・通学の利便性を求めて、若い世帯は団地外へ転出。いま暮らしている22世帯には、高齢世帯が多い。入居2年目頃から、誰でも参加できるお茶会を通じ、入居者同士のふれあい、見守り合いが一層育まれるようになった。

### 住民主体のお茶会

同団地に入居した人たちは、東日本大震災発生時、皆雄勝地区の沿岸部で被災。沿岸部のどこに住んでいたか、話してみればお互いに相手の地域のことを知っているもの、もともとご近所づき合いのある間柄ばかりではなかった。ただ、同じ被害を受けて同じ境遇にいる人同士、仲が良くなるのにそれほど時間はかからなかったという。

同団地では、森林公園の施設を集会所代わりに借りていて、よく高齢者数人に

よるお茶会が開かれる。開催予定日が細かく決まっているわけではないが、「家のなかにはばかりこもっていいは良くない」と、コーヒーや菓子を用意し、世間話や身近な出来事などを話したり、ご近所同士で顔を合わせて楽しく過ごしている。

もともと仮設住宅団地としての集会所や談話室は設けられてなく、森林公園の施設を使えるようになるまでは、敷地内の大きな桜の木の下にテーブルを出して、ほぼ毎日、屋外でのお茶会を行っていた。誰が言い出したわけでもなく、天気の良い日など、午前中に2時間ほど開かれるようになったこの集まりでは、通りがかりの入居者にも「お茶飲んでかいん（飲んでいきなよ）」と声をかけて呼び止め、参加してもらうことで交流を深めていた。

### 認知症の人の見守りに

以前、同団地に暮らし、お茶会に参加していた、ある80歳代の夫婦は、認知症の奥さんの身の回りのことをご主人がお世話してい



## 仮設雄勝森林団地 木村 佐智子さん

「ご夫婦のためだけではなく、  
自分たちのためでもあるの」

た。仮設住宅に入居した当初は、特に認知症の症状は現れてなく、奥さんはひとりで山へ山菜取りに出かけては、たくさん収穫して帰ってくるなど、心身ともに健康で、不自由なく暮らしていた。しかし、年を重ねるにつれて認知症が進み、2、3年ほど前から徘徊するようになったという。

認知症の奥さんは、ふだんは明るく会話をするが、調子が優れないときなどは、強く怒りだしてしまうこともある。また、団地の外へ歩いていくほどの体力もあり、ご主人が気づかないうちに奥さんがひとりで行方不明になってしまふことが何度もあった。

団地周辺で奥さんを探して回ったり、ご主人が介護に苦労している様子は、団地内のほかの人たちにも伝わっていた。お茶会によく参加するメンバーは、「奥さんが穏やかに過ごせるように」「ご主人が気を休める時間をつくれるように」と、夫婦をお茶会へ招くようになったのだ。

奥さんは、5分前の出来



緑に囲まれた仮設雄勝森林団地

事を忘れてしまうこともあるし、皆の顔と名前を正確には記憶していない。会話をしながら皆が笑っているのを見て、自分が笑われたと勘違いして怒ってしまうこともある。しかし、認知症で奥さんの気持ちが落ち着かなくなったり、怒りっぽくなっても、皆と一緒に歌を歌ったり、奥さんの深い記憶に残っている昔の出来事についておしゃべりをして、楽しく、気持ちよく過ごしてもらえるように工夫してきた。

ち明けることがあった。お茶会の間は、ご主人が奥さんのことをあまり心配せず、リラクセスできるため、ご近所の存在は心強い。お茶会以外でも、家から急いなくなってしまう奥さんを入居者が探したり、夫婦の支えとなっていた。

### 見守りは災害公営住宅へも

同団地の皆に見守られていた夫婦は、市内の災害公営住宅に転居した。車で10分ほど離れたところに住んでいるが、同団地に暮らす人たちのお茶飲みも継続されている。

同団地で夫婦の隣に住んでいた木村佐智子さんは、特に身近で夫婦の様子を見ていたひとり。週1回、2時間ほど、ほかのお茶会メンバーと3人で、夫婦の暮らす災害公営住宅へ、2人の顔を見に訪ねている。

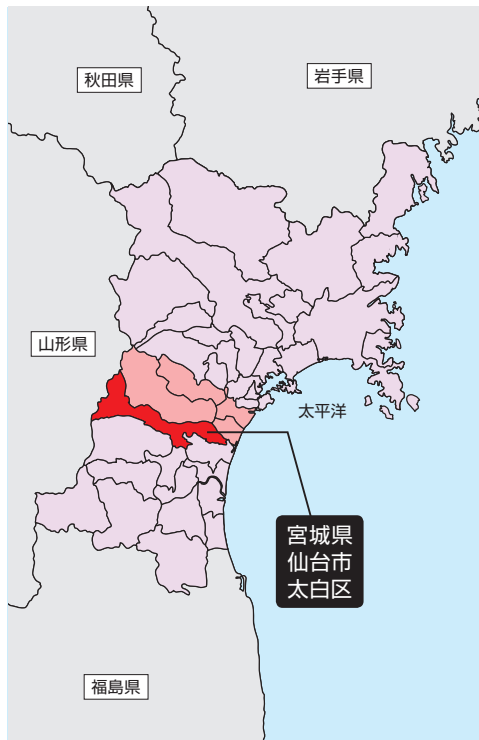
部屋に入ると、ご主人がお茶を煎れてくれ、奥さんが「これ食べな」とお茶菓子を配ってくれる。「災害公営住宅では、あまり人が出歩いていない」と2人は

寂しがっているようだが、仮設住宅の仲間が遊びに来てくれれば、明るい気分になれる。奥さんにとって、お客にお菓子を渡し、食べてもらうことは、自分のたいせつな役割で、楽しみの1つになっているようだ。

木村さんが、「見守りの取り組みについてより、普通のことをしているだけ。ご夫婦のためだけではなく、自分たちのためでもあるの」と言えば、ほかのメンバーもうなずきながら、「奥さんは本音で話すし、おもしろい」「人柄が良い」と。ただ一緒に過ごすだけではなく、向き合っつき合っていることが伺える。

「お茶飲みをすると、いつも笑って帰ってくるんだ」と、メンバーは笑顔でお茶会のことを話してくれらる。「もう少し暖かくなったら、またご夫婦を連れてきて、桜の木の下でお茶会をしたい」と、夫婦を交えてのお茶会を、メンバー皆が楽しんでいる。

入居者一人ひとりの思いやりの気持ちが形になった自然な見守りは、地域を暖かく包み込む。



住宅内を巡回する青木さん

## つながりから生まれた、住民による見守り活動

◎鹿野復興公営住宅（宮城県仙台市太白区）

### ポイント

- 住民の手で行われる全戸対象の巡回見守りが、日々の平穏な暮らしを守る
- 福祉委員による訪問見守り活動が、ひとり暮らしの高齢者の心豊かで、安心な生活を支える

### 住民の暮らしを守るために

宮城県仙台市太白区にある鹿野復興公営住宅には、毎晩欠かさずひとりですべて住宅内の見守りを行っている住民がいる。見守り活動は、復興公営住宅の住民である青木治男さんが自主的に始め、2年以上に渡って継続してきた。

きっかけはこうだ。2014年9月、同復興公営住宅へ入居した青木さんは、隣に住む高齢女性から「心配なので、毎日声をかけてもらえないか」と相談をされた。快く引き受けることになった。冬の間は「寒くなるから声がけは大丈夫ですよ」と言われたものの、足の悪い彼女のこと気がかりだったため、定期的に外から見守りをしていった。そのうち、「ついだから」と、そのフロアの見守りも始めるようになった青木さん。ほかの住民から誤解を受けないように、フロア長（各階に一人ずつ設置された役員）に見守り活動を報告したところ、「住宅全部をやっていただけないか」と提案を受け、現在に至っている。

見守りは夜間におよそ40分かけて、全2棟70戸の住宅と集会所、駐車場を巡回していく。最近では、駐車していた車のタイヤのボルトが盗まれる事件があったことから、停めてある車の状態や不審な車が無いかを特に意識して見て回っているという。「夜間も青木さんの見守りがあるから安心できます」という住民の声も聞こえてくるようになった。住民の安心・安全のために、青木さんは今日も歩みを止めない。

**住民の健康な生活を守り、気持ちに寄り添う**

鹿野復興公営住宅では、このような住宅の外からの



鹿野復興公営住宅の外観



## 平賀道子さん(左)と小野寺桂子さん(中央)と青木治男さん

「たいせつなことは、日頃からの挨拶・声かけ。見守りのとき以外にも気にかけています」

巡回見守りととともに、いわば内からの見守りともいえる戸別訪問も行われており、住民の安心・安全を支える両輪として機能している。

戸別訪問を行うのは、住民のなかから選ばれた福祉委員4人だ。福祉委員は各棟の住民から2人ずつ選ばれ、自分の棟の見守りを担う。2人1組の体制で、75歳以上の単身高齢世帯のもとを月2回訪問し、「食事をきちんととっていますか」「通院を定期的にされていますか」といった住民の生活状態を尋ねている。ひとり暮らしの高齢者は、健康面に不安を抱えている人が多く、出歩く機会が少なくなりがちで、(特に男性は)食事が偏ってしまいがちなためだ。体調面などで気がかりな点は記録にも残し、福祉委員と民生委員とで情報を共有してきた。必要であれば民生委員とおして地域包括支援センターへ連絡を入れ、支援に結びつけている。仙台市社会福祉協議会には、小地域ネットワーク活動として、見守り回数

を報告し、助成を受けている。「いろいろなつながりがあつて、成り立っています」と福祉委員で、元看護師の平賀道子さんは説明する。

訪問を始めたばかりの頃は、警戒する住民もいて、ドアを開けてもらえないこともあった。それが、毎回の訪問時や、ふだんから住宅で顔を合わせたときに、「こんにちは」「お元気ですか」と挨拶を交わすうちに、関係が育まれてきた。いまでは、いろいろな話をするようになり、「お茶を飲んでいって」「また来て」と福祉委員の来訪を心待ちにしている人が多くなったという。そればかりでなく、住宅で行っている草取りや掃除の場に顔を出してくれる人も増えてきた。

鹿野復興住宅では、カラオケ愛好会(詳しくは本誌第46号参照)などのサークル活動、行事も活発に行われている。「いろいろな人に会わせてあげたいから」と、平賀さんたちは訪問時にそういった活動への参加も呼びかけてきた。サークル活動や行事に参加することが健康維持や見守りにもつながるのだが、なかには「大勢の人が集まる場合は苦手」と抵抗を感じる人もいる。そうした人たちも、福祉委員と世間話をするのは楽しみにしていて、「いつでも来てくださいね」と話す。福祉委員による見守り活動は、住民の健康生活を維持するだけでなく、住民の孤立防止やその気持ちに寄り添う支援になっている。福祉委員である平賀さん自身も、「毎回の訪問が楽しみ」と話しており、きつとそういう肩肘を張らないかわり方が、訪問される側にとっても心地よいのだろう。

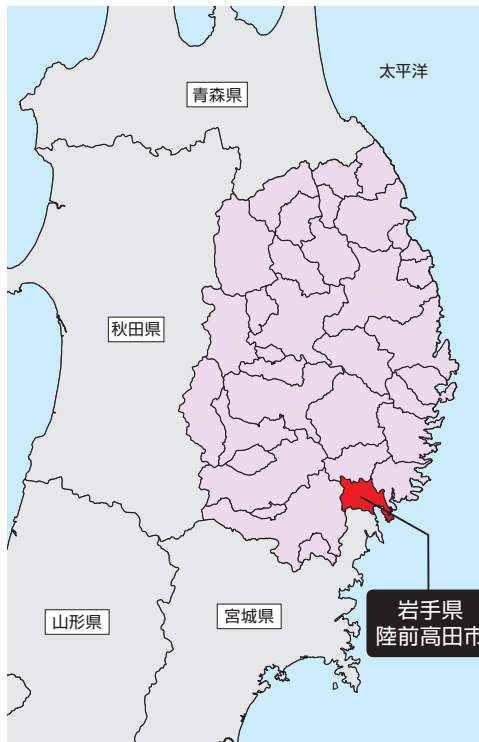


訪問中の福祉委員

### 住民による 住民のための見守り

このような、住民による住民のための見守り活動をサポートするのが、世話人会の存在だ。世話人会は、有志の住民から構成され、住宅内のゴミや雑草、ペットなどの諸問題に取り組み、地域住民と一緒に各種イベントを開催してきた。世話人会代表の小野寺桂子さんは、青木さんに見守りのために必要な情報を提供して協力している。そのほか、住宅内の事件や行事などを紙面にまとめ、全戸配付して、住民間の情報の共有や防犯に役立っている。

最近では、見守り活動時以外にも、「あの方最近見かけないけど、大丈夫かしら」という住民の声が、青木さんや平賀さん、小野寺さんたちに寄せられるようになった。役割の有無にかかわらず、住民同士でお互いを気にかけて、見守り合うような関係性も芽生えてきたようだ。



菜園クラブ「はなみずき」のメンバー。左から及川ミヨ子さん、熊谷東和子さん、佐々木公子さん、松本エイ子さん、熊谷カホ子さん

## 野菜づくりをきっかけに、見守られ、見守り合う関係に

◎菜園クラブ「はなみずき」(岩手県陸前高田市)

### ポイント

- 野菜づくりをとおして、ゆるやかに気かけ合う関係
- 野菜の出品などの社会参加をとおして、カフェのスタッフやまちの人から見守られる活動
- 気軽に声を掛け合い、連れ立って出かけることで、外出の楽しみができる

陸前高田市役所のほど近く、個人医院や薬局などが集まり、高台の拠点になりつつある場所に、「街のリビングプロジェクト」の一環としてNPO法人りくカフェが運営する、コミュニティカフェ「りくカフェ」がある。同カフェで提供されている、栄養バランスを考えた「低カロリー・減塩」の健康ランチは、周辺住民のみならず、観光や視察で訪れる市外からのお客さんにも人気だ。

料理に使用する食材を丹精するのは、菜園クラブ「はなみずき」のメンバー。平均年齢80歳前後の5人が、お互いに協力し合いながら、毎日野菜づくりを楽しんでいる。カフェで使い切れなかった野菜は、店内で直売も行っている。新鮮でおいしい野菜は訪れる人にも好評で、「おいしかったよ」と声をかけてくれる人や、出品を楽しみにしている人もいるという。

### 菜園クラブの結成を

きっかけに

5人が仲良くなったのは、復興支援のバスツアーへの参加がきっかけだという。2015年10月、カフェのスタッフから、カフェへ野菜を提供することをもちかけられたのを機に、同クラブを結成。以来、野菜づくりを協力して行ううち、仲が深まっていったという。

ほかのメンバーの畑の様子を見て参考にすることも多いため、誰かの家に行くよりも、お互いの畑を訪れることが多い。「畑に行けば、誰かしらいるから、退屈しないの」とメンバーは口を揃える。農作業だけでなく、畑でするおしゃべりも、楽しみの一つだ。及川ミヨ子さん(82歳)は、「はじめは長くはできないと思っていただけ、みんなで作っていたら、いつの間にか1年半も経っていました」と笑顔を見せる。

誰かの体調が悪く、野菜の提供ができないときなどは、ほかのメンバーが足りない分の食材を補うこともある。日頃から気軽に行き来して、お互いの状況をゆるやかに気に

かけることが、無理のない活動につながっている。

5人集まれば話題にのぼるのは畑や野菜のこと。上手な育て方、それぞれの畑の状況、今度育ててみたい野菜のことなど、話が尽きることはない。

「こうやって、わからないことは教え合って工夫できるから、続けられるの」と話すのは、メンバー内で最年長の熊谷カホ子さん（85歳）。「一番年上だから、助けられてばかり」と言いつて笑うと、すぐにほかのメンバーから「何言ってるの、あなたががんばってるから、私もがんばろうと思うのよ」と声がかかる。年かさのメンバーが生きいきと活動する姿は、ほかのメンバーを元気づけている。

気軽に誘える

仲間がいるから

近頃は野菜の売り上げを貯めて、月に1度、それぞれの旦那さんも一緒に、日帰りで近くの温泉に遊びに行くのが恒例になっていく。「(野菜の提供を)始めたころは、旦那に少し気がねしていたけど、いまは一

緒に温泉に行っているんだから、文句はないでしょ」と熊谷東和子さん（75歳）

がいさぎよい笑顔とともに言い切ると、「そうだ、そうだ」の声とともに5人の笑い声が弾けた。

菜園クラブを始めてから、外出の機会が増えたという。「1人だと億劫だけど、気軽に誘えるみんながいるから、行ってみようかなと思うようになりました」と及川さんは話す。バスツアーやコンサート鑑賞に出かけるだけでなく、ボランティアで手芸のキットづくりに取り組むなど新しいことにも挑戦するようになった。

生きいきと仕事をしながら、お互いに見守り合い、協力し合う関係が、5人の生活を、より豊かにしている。吉

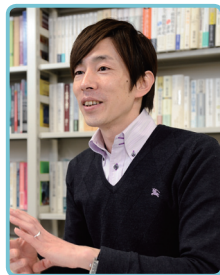
DATA

菜園クラブ  
「はなみずき」

15年10月結成。NPO法人りくカフェが運営する、コミュニティカフェ「りくカフェ」に、それぞれの畑でつくった野菜を提供するほか、カフェ内で直売も行う。

専門家に聞く地域づくりのヒント

見守り活動の原点は、  
住民同士の「気づかい」にあり



同志社大学 社会学部 准教授

永田 祐 (ながた・ゆう) さん

上智大学文学研究科社会学専攻博士後期課程修了。日本学術振興会特別研究員、立教大学コミュニティ福祉学部助手、愛知淑徳大学医療福祉学部専任講師を経て、現職。専門は、介護保険などの社会福祉政策および市町村を中心とした地域社会政策、地域福祉。社会福祉士として成年後見活動も行っている。主な著書は、「地域福祉論」（共著）、「住民と創る地域包括ケア」（単著）など。

「見守り」の辞書的な意味は、「気をつけてみること」である。一般には、子どもや高齢者など、気がかりな人を「気をつけてみる」と理解していいだろう。同じ「気をつけてみること」でも、気がかりな人ではなく、不審な人を「気をつけてみる」という場合には、普通見守りではなく「監視」というのだろうし、専門職は「観察」という言葉を使いそうである。同じ「気をつけてみる」ことも、見守りというのと監視や観察というのでは、私たちの感じ方は大きく違うはずだ。私は、見守りと監視や観察の大きな違いは、見守る側と見守られる側の関係の出発点が、気がかりな人への「気づかい」にあることだと考えている。つまり、住民同士の見守りは、同じ地域で暮らしている住民同士の気づかいが根っこにあるところがある特徴なのである。

鹿野復興公営住宅の青木治男さんは、隣に住む住民が「気がかり」でこの活動をはじめ、その「気がかり」の範囲は住宅全体に広がった。「はなみずき」の皆さんは、お互いに協力している仲間だから、当たり前のようにお互いを気にかける。仮設住宅で一緒にお茶会に参加していた「奥さん」が認知症になれば、みんな「気がかり」なのだ。

気がかりな人を「気をつけてみること」は、必ずしも「見守り活動」

という名前を付けて行う必要はないだろう。野菜づくりを一緒にしていれば、お互いを気にかけるのは当たり前だし、お茶会に来ていた人が困っていれば、何かできることはないかと考えるようになる。仮設雄勝森林団地の木村佐知子さんの、「見守りの取り組みについてより、普通のことをしているだけ」という言葉は、住民同士の見守りの本質を表している。

もちろん、こうしたベースの上に、見守り活動を「しくみ」としていくことも大事である。「線の見守り」を「面の見守り」にするためには、鹿野復興公営住宅のように住民同士が情報交換する場をつくったり、専門職がそうした場にしっかりと顔を出して、困ったことがあればそれを受け止め、安心感をもってもらうことが必要である。

行政から見守る人の名簿をもらわないと見守り活動ができないという地域もある。地域の人が自分の地域の「気がかりな人」を行政に教えてほしいという。こうして始まる見守りは、「この人が気がかりだ」という出発点がないため、監視や観察に陥りやすいのではないかと私は思っている。見守り活動を推進する側は、すぐに「早期発見」といった言葉で見守り活動の機能ばかりを強調するが、それはあくまで結果である。この3つの事例を読むと、お互いを気づかう関係性が、見守り活動の原点にあることに改めて気づかされるのである。





★準大賞

## 人形劇団あんど娘

(岩手県大槌町)

### 授賞理由

張りのある大きな声と新しい演目にも挑戦されている姿がすばらしく、皆さんが楽しく仲良く活動している様子が伝わってきます。その努力をたたえこれを賞します。

人形劇団あんど娘は、大槌町に代々伝わる民話を、地元、安渡地域の言葉で演じる。活動目的は、大きく4つだ。

①子どもとふれあい、情操教育に資すること。②高齢者と交流し、生きがいの場をつくること。③諸団体と交流を深め、劇団の活性化につなげる。④町の文化活動と連携を図り、協働事業と位置づけ活動すること。そうした目的のもと、町のバラエティショーや町内外の老人クラブとの交流の場、町内の保育所老健施設などで人形劇を披露し、好評を博している。

あんど娘は1998年に、大槌町中央公民館安渡分館で「郷土の民話と人形劇」の講座を受講した。20歳代から80歳代の女性12人の手で結成された。しかし、東日本大震災の津波で人形も舞台も流出し、やむなく活動を中止する。

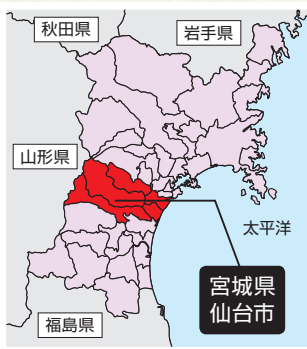
それが15年に入り、前代表が復活への強い想いを抱き、NHKと大槌町と連携して動く。それを受けて地域住民間でも話が盛り上がり、あんど娘を組織再編し、再開することが決まる。みんなで

人形づくりや舞台制作、練習に励んだ結果、短期間で活動を再開できた。現在は、21人の会員で震災以前にもまして活発に活動中だ。

「S-1グランプリいがす大賞」では、会員である安渡公民館長、関洋次さんが、劇団の映像上映とともに、活動を紹介。中盤からは、人形をもつた会員たちが、レッドカーペットを通過してステージに登場し、粋な演出に観客は沸いた。檀上では、ふだんの人形劇の様子を再現。観客からは、「人形がかわいい」「津波から立ち直り、伝統を復活させた姿に感動」と好評の声。審査委員からも高評価を受け、準大賞に輝いた。大会後は、大槌町長や当日参加した会員以外にも結果を報告。受賞のよさこびを分かち合った。

人形劇団あんど娘は、今後も、会員の絆を深め、尊重し支え合い、互いを気遣う心を育み、コミュニティを大事にすることを基本方針に、活動を広げる。町の民話を掘り起こし、ふる里の情景を人形劇で表現する活動も広げていきたいと考えている。—ふる里の情景よ、よみがえれ—  
**田**





# 災害公営住宅同士の つながりづくりで 自治会の活動をあと押し

## 「つなプロ」復興公営住宅自治会情報交換会 (宮城県仙台市)

まじわる！  
集団移転 &  
災害公営住宅  
第23回

3月16日(木)に仙台市福祉プラザで、「復興公営住宅と地域のコミュニティ活性化のための『つなぐ・つながるプロジェクト』(通称…つなプロ)」の二環として復興公営住宅自治会情報交換会が、仙台市健康福祉局生活再建推進室と仙台市社会福祉協議会中核支えあいセンターの主催により開催された。同プロジェクトでは、仙台市と仙台市社会福祉協議会が連携し、復興公営住宅町内会がその活動を自発的・継続的に行えるような仕組みづくりに取り組んでいる。16年11月にはその第一弾として、これまで仮設住宅等の支援に携わったことのあるNPOや企業、ボランティアなどの支援団体を集め、支援団体と復興公営住宅自治会をつなぐための冊子、「つなカタログ」の作成を行った。同カタログには各支援

団体のプロフィールに加え、各種助成制度などが記載されている。各自治会に1冊ずつ配付され、イベント等で支援団体の協力を仰ぎたい時には、同カタログを参考に、仙台市社会福祉協議会のコミュニティソーシャルワーカー(CSW)のサポートを得ながら、依頼ができる仕組みになっている。

今回は、同カタログの使用  
方法の説明と、自治会同士の  
情報交換を目的に開催さ  
れた。現在、仙台市内には  
40の復興公営住宅が整備さ  
れているが、そのうち17の自  
治会から26人が参加した。  
同カタログの使い方の説明の  
あと、実際にカタログ内に掲  
載されている支援団体の支  
援を受けて、交流会などを  
開催した活用事例を、田子  
西こだま会の会長の鈴木  
み子さん、中倉市営住宅  
自治会を担当する仙台市社  
会福祉協議会のCSWの  
黒田晋さんが報告した。入  
居当初は両隣の部屋に誰が  
住んでいるかもわからない状  
況だったという鈴木さんは、  
味の素グループの支援を受け  
て開催した料理教室をお  
して、次第に住民同士がう

ち解けていった様子を報告し  
た。当時の苦労を思い、声  
を詰まらせる場面もありな  
がら、「いまでは、顔の見え  
る関係から、気軽に挨拶を  
するなど、声の聴ける関係  
になった。楽しい時間を過  
すことができている」と笑  
顔を見せた。

会の中盤には、同カタログ  
に紹介されている「アメリカ  
ンダンスランチ/特定非営利  
活動法人 J-PPAL」の  
デモンストレーションがあり、  
カントリーライヴダンスの披露  
のあと、参加者全員でダンス  
体験を行った。ほとんどの参  
加者が初対面同士だったが、  
音楽に合わせ、身体を動かす  
うちに自然と笑顔がこぼれ、  
リラックスした雰囲気、続  
く情報交換会が開始された。  
情報交換会では6グル  
ープに分かれ、ふだんの自分  
たちの活動や、悩みなどに  
ついて話し合った。今回は自  
由にグループ内で意見交換  
をするため、グループワーク  
などの形式はとらず、各班  
にファシリテーターとして、  
市内で復興公営住宅の支援  
に携わるCSWが1人ずつ  
加わった。同じ市内で自治  
会の運営に携わる参加者同



グループで話し合った内容を発表する参加者

士、悩みや課題にも共通する部分が多く、会の最後に各班で話し合ったことを発表した際には、「もっと早くこういった会があればよかった」という意見が多くあげられた。これを受け、中核支えあいセンター所長の吉田幸江さんは、「これから、このような会を続けていきたい。今日はまずその第一歩。自治会同士のつながりはもちろん、今後は、支援団体も交えた情報交換会ができれば」と話した。

市内のほとんどの復興公営住宅で自治会が発足し、徐々に活動も定着してきたいま、今後その活動を継続していくためのあと押しとして、同プロジェクトの果たす役割は大きい。吉



# 福島の光となるような催しを、 新たな一歩に向けて

## 復興公営住宅「東原団地」 (福島県郡山市)

まじわる！  
集団移転 &  
災害公営住宅  
第24回

福島県郡山市の復興公営住宅「東原団地」で2017年3月25日、芸能展示発表会「福光展」が開催された。この発表会は、同団地内の集会所で週に2回行われているサロンで、手芸作品づくりが盛んだったことから、作品の展示をメインに同団地の住民や団地周辺に住む住民が日頃取り組んでいる活動の発表の場として企画された。団地会副会長の守口哲次さんにより「福島の光となるように」との思いを込めて、「福光展」と名付けられ、16年3月に続き2度目の開催を迎えた。2、3号棟が入居から間もなかったこともあり、1度目の開催の際には1号棟の住民が中心だったが、今回は3棟の住民が一丸となり、団地会役員を中心に実行委員会を組織して運営に臨んだ。2か月ほ



住民が講師となった、粘土細工の体験コーナー

ど前から準備をはじめ、企画や準備、各協力団体との調整や広報などを行ってきたという。当日は、団地集会所内に、住民が制作した手芸・工芸などの作品の展示・販売のコーナーを、集会所周辺の屋外に軽食の店と飲食スペースを設けた。そのほかにも、集会所内では、午前には住民有志による粘土細工の体験ワークショップや、ボランティアによるハンドマッサージが、午後は近隣の地域で活動する趣味のサークル・団体による芸能発表会が行われた。作品の販売コーナーに手づくりの布小物を出品した女性住民は、「みんなによるこんでもらえてうれしい。1年か

けて作品をつくりためて、また来年も出品したい」と意欲を見せた。午後からの発表会に参加した各サークル・団体は、同団地の建つ地域の公民館「富田東公民館」を練習の拠点としており、メンバーもほとんどが地域の住民だ。日頃の練習の成果を披露することにより、団地住民が地域で行われている活動を知ることができると同時に、参加したサークルのメンバーにとっても、自分たちの地域にできた復興公営住宅の様子を知り、住民との交流を深めるきっかけにもなっている。また、周辺の住宅へのポステイングや、新聞・ラジオに広告を出すなどの広報活動にも力を入れており、周辺住民を中心に来場者は150人ほどにのぼった。団地会会計の加藤孝子たかこさんは、「寒いなかポステイングをするのはたいへんだっただけど、みんな協力してやったかいがあった」と笑顔を浮かべた。団地会会長（17年3月時点）の山口裕ゆたかさんは、「今

**DATA**

**復興公営住宅  
「東原団地」**

福島県郡山市喜久田町に整備された原発避難者向けの復興公営住宅。3棟85戸（1号棟50戸、2号棟15戸、3号棟20戸）からなり、大熊、双葉、浪江、富岡の4町の住民が居住している。

年も地域の皆さんや支援団体の皆さんの協力のおかげで、今日を迎えることができた。このつながりをたいせつにして、来年の開催につなげていければ」と話す。同会をきっかけに、さらにつながりを深めた同団地は、一歩ずつ力強い歩みで前に進んでいく。吉



屋外に設けられた飲食スペースで、カレーや焼きそばを食べながら談笑する住民

DATA

奏海の杜

〒987-0602  
宮城県登米市中田町上沼西桜場  
32-1  
TEL 0220-44-4171  
FAX 0220-44-4841  
(月曜～金曜 9:00～17:00)  
E-mail kanaminomori@mbr.  
sphere.ne.jp  
BLOG [http://blog.canpan.  
info/hsc\\_kenpoku/](http://blog.canpan.info/hsc_kenpoku/)

40回目

市民リレー

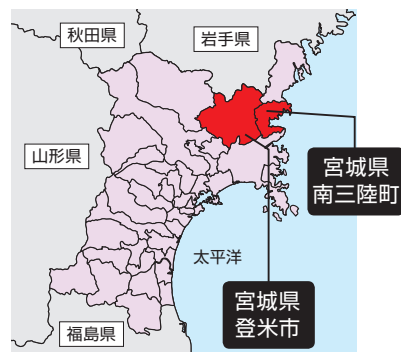
# 東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

## 一人ひとりの魅力が豊かに 響き合う地域づくり

◎特定非営利活動法人奏海の杜(宮城県南三陸町・登米市)



ぬくもりを感じながら、お話しに聞き入る子どもたち



一対一に近い、  
行き届いたケアがされているにこま～る



笑顔がはじける空間

「障がいがあってもなくても、誰もが自分らしく暮らせる地域の実現」という理念のもと、特定非営利活動法人奏海の杜は活動をしている。現在、放後等デイサービス事業と日中一時支援事業を、宮城県本吉郡南三陸町と登米市で展開する。同法人が運営する放課後等デイサービス事業所「子ども広場にこま～る」に伺った。そこにはトランポリンで遊ぶ子、オセロで対戦する子、勉強をする子、くつろぐ子などがいて、思い思いの時間を過ごせる場となっていた。職員はそんな子どもたちを温かく見守り、ときに一緒に遊んでふれあい、笑顔で声をかける。安心感や居心地のよさからか、子どもたちも屈託のない笑顔で応じる。子どもの成長と可能性を信じて待つこと、子ども自身が気づいて動けるようなかわり方、そして自分たちも楽しむことを、職員は心がけているという。

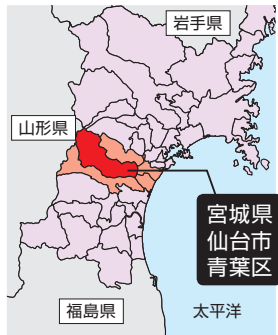
奏海の杜の母体は、東日本大震災時におかれた被災地障がい者センターの東北支部だ。同センターの職員3人は、それまで支援経験がなかったが、資格取得など学びを深めながら、活動を進めていった。最初は仮設住宅への物資配給や聞き取り調査、買ひもの支援を行って

た。2012年からはNPO法人奏海の杜となり、南三陸町と登米市で障がい児支援を始めた。それまで南三陸町にはそうした支援がなく、同じ時期に活動を始めた事業所とともに、その先駆けとなった。

「活動を続けるうち、障がい者福祉の担い手不足や制度にのらない人たちの存在など、地域の課題が浮かび上がった」と、代表の太齋京子さんは語る。奏海の杜では、課題解決のために、「個人の主体性」と「地域とのつながり」を軸に活動計画を組み立てている。具体的には、余暇活動の充実や運動・対話をとおして、障がいのある人の意欲向上・精神的充足と、地域の障がい理解促進を図っている。また、職員と地域の人に向けてソーシャルスキルトレーニング研修を開催し、職員の技能と地域福祉の向上につなげている。

今後も「支援者、非支援者を超えて、地域の住民としてお互いを支え合えるような、持続可能な支援の形を目指していきたい」と太齋さんは話す。みんなが笑顔で支え合い、優しいハーモニーを奏でるような地域へ。そんな願いが、奏海の杜の名前には込められている。

田



# 子育て中でも 手仕事で存分に活躍

オーダーメイドジュエリー工房 Lipatti  
(宮城県仙台市青葉区)



仙台市の定禅寺通り沿いに店舗兼工房を構える「オーダーメイドジュエリー工房 Lipatti」は、さまざまな色の鉱石や真珠などを用いてネックレス、イヤリング、指輪といったアクセサリーを手づくりし、インターネットなどで国内外へ販売している。工房勤務で9人、内職で2人のスタッフを雇用。男性は2人で、残りのほとんどが子育て中の母親だ。育児と仕事を両立できる職場づくりに努める、代表の草刈美智子さんは宮城県塩釜市出身で、東日本大震災をきっかけにもつくりの世界へ踏み込んだ。

震災当時、東京で暮らしを始めた草刈さんは、故郷を思い、仙台市に引っ越してきていた。子育てと仕事を両立したいと思い、ボランティア活動や寄付などを検討するも、専業主婦の自分のできることに限られていると実感。人の役に立てることを自分なりに模索し、料理のレシピを紹介するブログの開設から始め、おもちゃの製作、ネット販売などに取り組んだ。特に反響が大きかった、自主制作のアクセサリ販売を、宮城県で本格展開しようと帰郷した。

子どもの面倒を見ながら、ひとりで事業を進め、2013年4月に工房を開いた。しかし、自分の作品を購入してもらえないよさから、ますます制作に打ち込むようになり、長時間の作業で両手がけんしょう炎に

支えたいと思い、ボランティア活動や寄付などを検討するも、専業主婦の自分のできることに限られていると実感。人の役に立てることを自分なりに模索し、料理のレシピを紹介するブログの開設から始め、おもちゃの製作、ネット販売などに取り組んだ。特に反響が大きかった、自主制作のアクセサリ販売を、宮城県で本格展開しようと帰郷した。

そこで、仮設住宅に暮らす親戚や友人などに作業を頼んでみると、生きいきと取り組んでくれた。それをきっかけに、製造業務の経験の有無にこだわらず内職の輪を広げ、協力体制を整えた。育児中の同級生に声をかけるなどしてスタッフを増員。「子育てしながら作業できるなら働ける」という主婦たちのために、「子連れ勤務規定」を設けて、子連れ勤務の協力を仰ぐ。スタッフ全体の理解により、育児に励む母親が幼い子どもと一緒

に工房へ出勤することができ、子どもは、仕事に差し支えないように遊んだり、大人たちに笑顔で見守られながら過ごせる。子どもの体調



たくさんの素材と工具を用いて、誇れるジュエリーを世に送り出す



色も形もさまざまな商品のなかから、自分にぴったりの一品を(2,000円代~)



子どもを見守り合うのが、この工房の自然な姿

**DATA**

**オーダーメイド  
ジュエリー工房  
Lipatti**

〒980-0822  
宮城県仙台市青葉区立町23-11  
高速ビル3階  
TEL 022-281-8370  
定休日：土・日・月曜日、祝日

や行事、保育所への送迎の予定などによって、勤務時間・作業内容を融通させる。「ものづくりが好きな女性性は多く、皆楽しんでいて。地元から全国に誇れるブランドにしたい」と草刈さん。つくり手のやりがいに満ちた工房で、ジュエリーにも負けないほどのまばゆさを覚えた。

**清**

## ● Profile

ご近所福祉クリエイター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエイターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。

2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ、岩手県・宮城県・福島県で地域支え合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。

主な著書に、「見守り活動」から「見守られ活動」へ(CLC発行)、「生活支援コーディネーターと協議体」(共同執筆、CLC発行)。



## 女房孝行と年金波止場

ご近所福祉クリエイション 主宰 酒井保

火曜日はやめて!

先日、広島県某町の「地域支え合い講座」に登壇させていただいたときのこと。平日19時30分からの開催で、会場は新築の臭いが入るとスーツ姿の男性が3人、下足箱脇の分煙コーナーで談笑しながら煙を吹かしていた。仕事帰りのだろう、煙草を挟んだ手の反対側の手には、皆ビジネスバッグを持っていた。おそらく自治会の役員で、  
「動員」という慣例のもとに参加を強いられたのだろう。そう悟った僕は、「ご苦労様です」と心のなかで挨拶をした。

玄関でモタモタしている僕に、「よろしくお願いします!」と声をかけてくれたのは、この地域の自治会長さんだった。「いやあ、こんな時間でききや人が集まらんもので」と、頭を掻きながら控え室まで案内してくれた。

名刺交換を済ませ、湯茶の接待を受けている控え室に、参加者のザワザワが聞こえてきた。

「今日は、火曜日なのに。しかも、夜だなんて。明日にしてくれれば良かったのにねえ」

「ほんとにね。私は息子に録画を頼んだから大丈夫なだけだね」  
「もう、火曜サスペンス劇場がある日だけはやめてほしいわ」

女性たちの声が聞こえた。この女性たちの前で僕は、これから講

演を行わなければならない。針のムシロである。

集まる理由は、女房孝行

「火曜サスペンス劇場がある日は……」

これを聞いた僕は、社会福祉協議会で働いていた20年前のある記憶がよみがえった。

かつての職場だった廿日市市社会福祉協議会大野事務所は、広島県廿日市市大野という宮島の対岸に位置する瀬戸内海に沿った地域である。

その頃、わずかに釣りを趣味としていた時期があり、職場の上司から、「いま、丸石港でいい形のチヌがあつてほしい。今夜、行かないか?」と誘われたことがあった。丸石港というのは、地元の漁船が集う小さな波止場で、地元住民しか知らない釣りの穴場でもあった。

潮の頃合いをみて、「じゃあ、20時に現地集合で!」と申し合わせて、その日の勤務を終えた。

20時。薄暗いなか、波止場へ向かつて歩いていくと、こちらに向かつて手をあげる人影があった。上司である。こちら手も手をあげて、近づいていくと、上司が立っているその向こうに数人の人影が重なって見えた。

「よお! 酒井君も一緒だったか」  
民生委員のKさんとその友人3人が、上司を交えて談笑してい

るところだった。

Kさんたちは、それぞれに竿とクーラーボックスを抱え、「俺たちもいま来たところだ」と言いながら、クーラーボックスの上に腰を下ろした。

「皆さんもチヌを釣りに来たんですか?」と訊ねた僕に、Kさんから意外な答えが返ってきた。

「釣り? そんなもんはやらんよ。なあ、みんな」「そうそう。俺たちがやるのは、これ」と、それぞれが椅子代わりにしていたクーラーボックスを開いた。中を覗かせてもらおうと、缶コーヒーと菓子パンが入っていた。

「ほれ!」と缶コーヒーを差し出しながら、「今日は、火曜日だろ。だから、みんなここに集まってるんだよ。女房孝行のためにね」と言った。

男連中が、缶コーヒーと菓子パンで宴会!?

火曜日だから集まっている? 意味がわからず、ポカンとしていた僕にKさんは、「酒井君の奥さんは見ないのか?」と真顔で聞いてきた。「何をですか?」と返すと、「そんなことあ

決まってるじゃないか。火曜サスペンス劇場だよ」と。

「火曜サスペンス劇場……ですか?」

「そうよ。俺たちの女房連中は、みんな火曜サスペンス劇場を楽しみ

にしているんだ。俺たちが家の中にいたんじや、ゆつくり鑑賞できないだろ。だから、こうやってみんなが集まって……」

なるほど、「女房孝行とはそういうことか」と、僕は感心した。

「出かけるつて言っても、飲み屋に行つて飲み食いと金がかかるだろ。俺たちみんな年金暮らしたからさ。とりあえずは、釣りに行く。つてことにして、みんなが集まってるんだよ」

「缶コーヒーと菓子パンつて、ビールやお酒がほしくならないですか?」  
「アルコールはやらないんだ。根が生えちゃうからね」

お酒があると飲みすぎて時間を忘れて、帰るタイミングを失い、女房に心配をかけるからということだった。

短い釣り竿を地べたにおいて、缶コーヒーと菓子パンでの宴会が始まった。

「夜風にあたつて、海を眺めて……。さて、そろそろ23時だ。家に帰つても大丈夫な時間だな」とKさんたちは立ちあがり、帰り支度を始めた。

「釣りに行くつてくる」ということの意味を、女房の皆さんはご存じない。

帰り際にKさんは、こう呟いた。「俺たちは、ここを、年金波止場、つて呼んでるんだ」

年金波止場……、そう言うKさんたちが、僕にはかつてよく映った。

# 宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



## サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

### 支援を受けて意思決定、 地域の支え合い②

『意思決定支援』は、対人援助にかかわる者にとって、そしてあらゆる領域・分野においても、共有すべき基本理念のように考えています。英国の「意思決定能力法」の基本5原則を読んだ感想です。その一つを紹介합니다。

1. 意思能力を失っているという確たる証拠がなければ、意思能力はあるとする。

これは意思決定能力存在の原則です。契約社会においては、自己決定が原則。そのためには、いろいろな生活領域で「自己決定」「意思決定」を迷ったり、不安が生じてしまう人たち（誰でも）に、意思決定にかかるなんらかの支援が配慮されるべきです。

障害を有することで意思の形成が難しい場合や、意思の表明がうまくできない場合においてはなおさら、より丁寧に意思決定にかかる支援を準備しておくことがたいせつではないでしょうか。

判断能力の不十分な人たちのために、「成年後見制度」というものがあります。私も、虐待等を受けた高齢者や障害者の成年後見制度利用に精力を注いできました。この制度は、介護保険と車の両輪の役割として、平成12年の介護保険成立とともにスタート。後見人の持つ権限を通じて、認知症高齢者や知的・精神障害者の自己決定の補完的役割を担うものです。

しかし、正直に言うと、この制度を利用しないと守れない状況にあった高齢の方々への利用支援の多さに戸惑いました。後見人の役割も保護的になりやすい構図で、制度の理念たる本人の意思の尊重等は十分に配慮してきたか、という自問自答があります。成年後見制度のもつ課題です。

このような経緯で制度の社会化を進める一方で、日弁連の「人権大会」での『成年後見制度から意思決定支援制度へ』の提言は衝撃的でした。とても熱気のある大会でした。今回は、成年後見制度と意思決定支援制度との関係を考えます。意思決定支援制度のなかで「成年後見制度」をどう位置づけていくべきか、私的なこだわりをお話します。

## ひとりごと

サポーターのあなたへ



宮城県サポートセンター支援事務所  
アドバイザー 浜上 章

### 昨日まで支援員だったあなたへ お疲れさまでした。

いま、原稿を書いている時は、4月1日。近くでは桜の花がちらほらほろほろ始めた頃です。わが家の庭の雪柳の花も小さな白い花をつけて風に揺れています。家の前を毎日のように通学していった小学生も、6年生は卒業をしていきました。“安全協力員”をしている私に、卒業式の少し前に可愛いお礼の手紙をいただきました。

時は、常に流れ人々の仕事や暮らしも変化していきます。東日本大震災から丸6年が過ぎ、被災地も大きく変化しました。仮設住宅は縮小したり、解消したりしています。集団移転地への移転も完了したところもあれば、これから、ということもあります。災害公営住宅は、多くは慣れない集合住宅、それも高層のマンションタイプです。高齢者やなんらかのハンディを抱えている人たちにとっては、住みやすさと暮らしにくさが同居します。

この3月で生活支援相談員（以下、支援員）の仕事から離れた方、支援員のお仕事、本当にお疲れさまでした。当初から支援員をされていた方、数年前から、去年から1年間だけいろいろであったと思います。特に、はじめのころから支援員の仕事をされてきた方や、自らも“被災者”である方も多く、つらいことも多かったと思います。福祉の仕事経験のない一住民が、支援員という職業に就かれ、被災者と同じ地域住民、生活者としてこの仕事に精励されてきました。被災者にとっては、どんなにか心強く大きな支えになったことでしょう。

就労期間が短い方も、支援員という仕事でさまざまな経験と学びが、そして喜びもつらさもあったと思います。一人の後方支援者として願うことは、「支援員という仕事をしてきて良かった」と思っていただけのことです。円満退職される方もあれば、心のうちにモヤモヤとしたしこりを抱えながら辞めていった方もあるかもしれません。それでも、「支援員の仕事をしてきて良かった」と、思っていただけとうれしいな。『なじめなかった』『力不足で良い仕事ができなかった』と思っている方も、“この仕事には意味があった”と、思っていてほしいと願います。

そしてまた、時は流れていきます。“昨日の経験”が“今日・明日の経験”につながっていきます。これまで本当にお疲れさまでした。ありがとうございました。



41回目

市民リレー

# 東北の元気

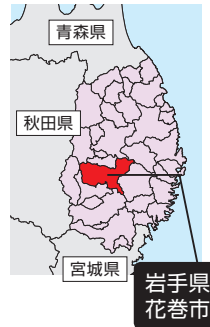
東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

今回は...

## くつろぎの空間で命の輝きに出会う

◎るんびにい美術館 (岩手県花巻市)

ライター: 熊谷智美



岩手県  
花巻市

ギャラリーとカフェとアートリレーが一緒になっている「るんびにい美術館」には、作品を見に来る人だけでなく、人気のチキンカレーを目当てに訪れる人も多いという。30年ほど前、社会福祉法人光林会の施設で暮らす人たちが陶芸を始めた。作品は花巻温泉郷での展示会や、障がいのある人たちのアート展などで発表していた。来場者からの「もっと見たい」などの声が、2007年11月の美術館オープンへとつながった。

カフェや階段など館内に展示されている作品は、2階のアトリエで創作活動をしている「こころと色の工房まゆくら」のメンバーの力作。平日の午前中は、アートリレーを見学することもできる。絵を描いたり、織物や刺繍、糸を結んだり、それぞれが得意な活動をしている様子は見ていて心地よく、手元の個性的な造形や色彩に刺激を受ける。

ギャラリーでは、企画展が行われていることも多い。今年4月中旬までは、東日本大震災を越えて生まれる作品を紹介する「命は創

造をやめない」という企画展が行われていた。障がいの者のアート作品だけでなく、ボードレス・ギャラリーとして、バラエティに富んだ展示を行っているのも特徴的だ。中学校や高校への出前授業も行っている。授業では講師を勤める小林覚さんの作風にならって文字をデザイン化するワークショップや、会話が得意ではない小林さんに代わって、同行するアートディレクターの板垣崇志さんが、小林さんの生い立ちや作品の説明をする。「障がい者ではなく、小林覚さんという個人との出会いの場を目指しています」と板垣さんは話す。

るんびにい美術館は、館名には「命のミュージアム」と添えられているように、アートをとおして、誰もが輝かしい「輝かしい命」をもっていることを感じられる場を目指している。

### DATA

#### るんびにい美術館

岩手県花巻市星ヶ丘1丁目21-29  
TEL 0198-22-5057 (ギャラリー・アトリエ) / 0198-29-5395 (カフェ・ペカリー)  
URL <http://kourinkai-swc.or.jp/museum-lumbi/index.html>

### ☆次号予告 特集「お店」

購読者を募集しています!

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか?

購読会員 年3,696円 (年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座  
口座番号: 02260-9-46303  
加入者名: 全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、  
①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み  
を記入してください。



### 読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

趣味やスポーツをとおして、生きいきと活動しているシニア世代の方々の記事を読んで、高齢者クラブが健康づくりや孤立防止だけでなく、地域全体の活性化につながっていることがよくわかりました。少子高齢化と言われる時代だからこそ、これからますますシニアパワーが注目されそうですね。(仙台市青葉区 A・W)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!  
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737  
E-mail [joho@clc-japan.com](mailto:joho@clc-japan.com)

### 編集後記

取材先で、弊紙を「知っています」「読んでいます」とのお声をたびたびいただきます。本紙が定着し、少しでもお役に立てているのであれば、うれしく思います。6年目を迎える今年度も新たな可能性を模索しつつ、原点を忘れずに、「震災を契機に生まれたもの」という視点ももって取材執筆に取り組みたいです。皆様の変なご支援のほど、よろしく願い申し上げます。(田中)

バックナンバーがホームページで読めます!  
[http://www.clc-japan.com/sasaesai\\_j/](http://www.clc-japan.com/sasaesai_j/)